

## オディロン・ルドン作《仏陀》再考

堀切 春水 (早稲田大学)

オディロン・ルドン (1840-1916) は、1895年から1910年頃までの約15年間に「仏陀」主題の作品を12点制作した。なかでもオルセー美術館所蔵の《仏陀》(1905年頃)は、1900年以後に画家が生み出した作品のなかでも、最も重要で最も完成度の高い作品のひとつとして高く評価される代表作である。しかし、先行研究の多くはジャポニズムの一端、あるいは晩年に多く描かれた神秘的な主題作品の一要素として位置づけているにすぎない。また各々の作品は具体的に解釈されることがなかった。本発表では、オルセーの《仏陀》を中心にルドンが描いた「仏陀」の再解釈を試み、同作品が持つ自画像的性質を提示する。

ルドンが描いた「仏陀」の表象は、図像の着想源、表現ともに実に多様である。まず、「仏陀」を主題とした石版画による最初期の作品(1895年及び1896年)はその画業初期に特有の「怪物」に類する姿で表現される。これらはギュスターヴ・フロベールの小説『聖アントワヌの誘惑』(画家、1880年刊行シャルパンティエ版所蔵)を着想源としており、同著における「仏陀」の記述に従い造形化されている。続いて制作されたパステルによる《仏陀の死》(1899年)では、作家自身が所有していた仏伝の「仏陀の死」に関する記述を造形化しており、ルドンによる涅槃図と解釈可能である。ルドンの「仏陀」に対する興味は、文字資料に基づき独自に視覚化されたことがこれら初期作品から見受けられる。一方で、《仏陀》(1904年頃)において描かれているのは、文字資料に基づく表現でもなければ、宗教的存在としての「仏陀」でもない。そこにはルドンの息子と確認できる人物描写が試みられており、もはや「仏陀」に姿を借りた肖像画としての役割を担っていると指摘することができる。さらに、オルセーの《仏陀》は、フランス国立ギメ東洋美術館所蔵の地蔵菩薩像を具体的図像源とした地蔵菩薩としての「仏陀」であった。

特定の宗教に加担することを忌み、晩年の画家としてのキャリアを肖像画家として確立することを目指していたルドンにとって、1900年代以降の「仏陀」主題もまたその目的を果たすための一要素に成り得たと考えることができる。

ルドンはその画業の初期は「黒」の画家として活動し、その後はまばゆい色彩世界へと転換することで知られる。オルセーの《仏陀》において「仏陀」が纏う袈裟はその画業を示唆する黒ときらびやかな色彩で構成され、その顔はルドンの代表作として名高い《目を閉じて》(1904年)を想起させる。また、背景においては当時名声を得ていた「花の画家」らしからぬ描写が見受けられる。モチーフと背景描写から、本作がルドン自身の芸術家としての姿を託した自画像としての役割を担うことを指摘したい。

以上のように、これまで具体的に解説されることのなかったオルセーの《仏陀》の意義を問い直す。